

日本語行為文理解時の視点取得と個人特性の関係

池田 裕哉

【背景】

行為を表す文章を読む際、その行為内容は心的にシミュレートされることが明らかになっている。この際、行為者の視点でシミュレーションを行う場合と観察者の視点でシミュレーションを行う場合があり、どの視点を取得するかによって後に行う課題の成績が変化する。例として Ditman et al. (2010)は、人称代名詞を操作することで読み手の視点が変わり、二人称の場合に行為者の視点を取得され再認成績が向上することを示した。しかし、英語で行われた Ditman et al.(2010)とは異なり、日本語材料で行われた望月・相澤(2017)では代名詞による視点の変化が見られなかった。

そこで、日本語材料であっても英語材料と同様の結果が得られることを確認するため実験 1 を行った。また、視点取得の規定因や効果はまだ明らかになっていない部分が多く、日本語における視点取得の特徴をより詳細に検討するため、実験 2 を行った。

【実験 1】

実験 1 は、人称代名詞の操作によって心的シミュレーションの視点が変わり、再認成績が変化するという現象を日本語文でも再現することを目的に行った。

望月・相澤(2017)や池田・紀ノ定・篠原(2017)では Ditman et al.(2010)とほぼ同様の手続きを用いているにもかかわらず、結果は再現されなかった。その原因として(1)呈示した人称代名詞が無視されている可能性がある、(2)個人特性を考慮していない、の 2 点に着目し、それらを考慮した上で検討を行った。実験は望月・相澤(2017)とほぼ同様の手続きを用いたが、人称代名詞を必ず見る必要がある手続きを新たに加え、個人特性として空間認知方略の選好を測定し、参加者を主観的方略を好む群と客観的方略を好む群に分類した。

その結果、参加者の群によって代名詞の効果が変化した。主観的方略を好む参加者は代名詞が二人称の場合に行為文の再認成績が向上したが、客観的方略を好む参加者には同様の効果が見られなかった。このことから、主観的方略を好む参加者のみ代名詞によって心的シミュレーション時に視点を変化させていることが示唆され、個人特性を考慮していなかったことが日米間の結果の違いを生んでいたことが示唆された。

【実験 2】

実験 2 は主に、文章読解中の処理を計測するオンラインの課題と文章読解後時間が経ってからの処理を計測するオフラインの課題とで視点の効果が異なるかどうか、空間認知方略の選好以外の個人特性が視点取得に影響を与えるかどうかを検討するために行った。オンラインの課題として有意性判断課題、オフラインの課題として偶発再認課題を使用し、空間認知方略の選好に加え LRQ-J(小山内・岡田, 2011)によって没入特性を測定し、それぞれ検討を行った。また、これまでに用いられてきた短い文章ではなく、300～500 字程度の文章を用いることで、より現実場面に近い状況を想定した。

実験の結果、オンラインの課題とオフラインの課題とで視点条件の効果が異なって現れた。有意性判断課題では主観的方略を好む参加者に視点の効果が現れたが、偶発再認課題では参加者に関わらず一貫して視点の効果が現れなかった。このことから、視点の情報は記憶表象の中で優先的に失われ

ている可能性が示唆された。また、LRQ-J で測定した没入特性は視点取得の効果を予測していなかった。このことから、少なくとも本実験の文章材料においては、没入特性が視点取得に盈虚を与えていないことが示された。

【総合論議】

本研究によって、視点取得の性質が以下のように明らかになった。まず、視点は人称代名詞のような文章自体の形式によって変化するが、個人特性の影響も強く受ける。特に空間認知方略の選好が強く影響を与え、主観的方略を好む参加者は文章に従って柔軟に視点を変化させていることが示唆された。しかし、本研究ではその他の個人特性と視点取得の関係性を明らかにすることはできなかったため、さらなる検討が必要である。

次に、視点情報は時間の経過によって優先的に失われていくと考えられる。実験 2 において、読解直後の課題では視点の効果が現れたが、読解後時間を置いた後の課題では視点の効果が現れなかった。後者の場合でも文章の記憶自体は保持されていたため、記憶表象の中で視点情報は失われやすい情報であると考えられる。しかし、実験 1 のように意図的な記憶方略を取れば、視点情報を長期間保持することも可能であると考えられる。(応用認知心理学)